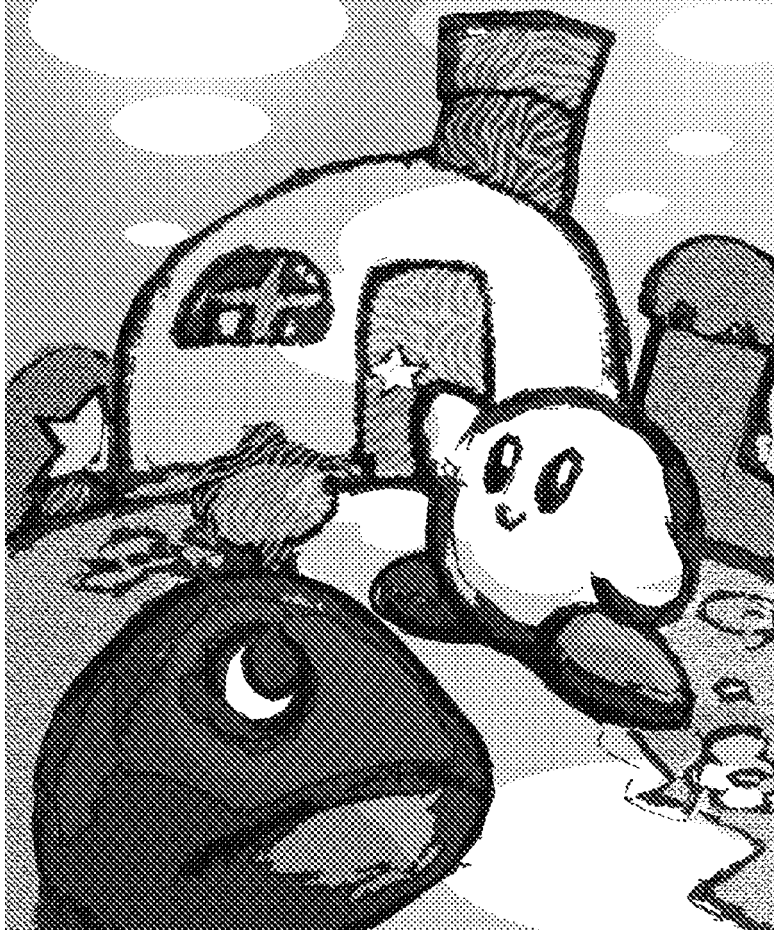


きょうのごはん Vol.2

2010.3.21はっころ



皆様初めまして、あるいはお久しぶりです。カービィ小説MLの八ガネカービィと申します。本日は当サークル、カービィ小説ML出版部にお立ち寄り頂き、ありがとうございます！

カービィ小説ML（以下KNML）は、『星のカービィにまつわる二次創作小説を自由に発表し、意見交換できるメーリングリスト』となつていきます。活動としてはもう割と長いのですが、最近になつて、もっと多くの人にカービィ小説の面白さを知って頂きたい、仲間を増やしたい、また、KNML自身もどんどん色々なことにチャレンジしていきたい、という思いから、オフライン活動サークルである、出版部、としての活動も開始致しました。イベント参加、ペーパーの発行は、今回で二回目になります。

さて、小説の面白さを知って頂くには読んで頂くのが一番、という事で、次のページからは短編を丸ごと一作、掲載しております。今回の作品は、KNMLにて『あつたか』というお題にてペーパーサイズの短編公募を行い、人気投票の末に選ばれた作品です。多種多様なカービィ小説の中の一作品ではありますが、カービィ小説の楽しさを少しでも感じて頂けたら、と思います。それでは、どうぞ。

◆ 既刊情報 ◆

「はるかぜのものがたり」

2009. 12. 1 発行 /A6(文庫)/P244/4Cカバー /4C口絵 2P

KNML | カービィファン有志による短編小説集。総勢 14名による小説&イラストを収録。

「きょうのおやつ」

2009. 12. 29 発行 /A5/P28/4C表紙

KNML有志によるオールキャラ漫画&小説本。総勢 5名が参加。

ほかほかハート

みすたあぼん

闇ばかりの空間で生まれた僕が初めて光を目にしたのは、当時のマスターだったゼロの命令で外界を偵察に行ったときでした。確かにゼロの言うように、光は僕らの力を半減させる物に他ならず、光の中では常に体が重く感じられ、満足に動くことすらできませんでした。それでも僕はどういうわけか、忌むべき存在であるはずの光に憧れてしまったのです。偵察から戻ってきた僕は光を侵食すべきなのか否か、今一度ゼロに問いかけました。すると途端に僕は麻袋に押し込められ、外界に放り出されてしまったのです。

そついうわけで、僕は数日間を麻袋の中で過ごすことになったわけなのですが、何故なのでしょう、今までは闇ばかりの空間にいても何も思わなかったというのに、麻袋の中で過ごしている間は、偵察中に垣間見た光が恋しくてたまらなかつたのです。光の中に出たところで、僕に利点は一つも無いと言つのに。

僕が意せずして光と再び出会つたのは、麻袋の中で数日が経過してからでした。麻袋の中では時間が分からないので、もしかするともっと短い時間が、長い時間もかもしれません。とにかく僕は突然、麻袋の中から光の下へと引きずり出されたのです。

「大丈夫？」

僕が押し込められていた麻袋を開いたのは、

桃色の球体　カービィでした。この星の守り手という危険因子として、僕は彼の存在を知っていましたが、当然彼は僕を知りません。彼は無邪気に無防備に、僕を心配そうな顔で見つめて、もう一度

「大丈夫？」

と聞いてきたのです。僕は黙ってうなずきました。

「ここいらじゃ見ない顔だけれど、君もダークマターに捕まったの？　それでこんなところに閉じ込められてたの？」

カービィは僕に問いかけます。僕は黙って頭を横に振りました。

「じゃあ、どうして？」

「……」

その質問に、僕は答えることが出来ませんでした。

「答えたくないの？」

今度はうなずきました。

「帰り道、分かる？」

この質問に僕はしばらく考えました。ハイパーゾーンへ帰ることは簡単でしょうが、帰ったところで僕の居場所など、今更無いように思えたのです。しばらく考えて、僕は首を横に振りました。

「じゃあ、僕の家においでよ」

そう言ってカービィは微笑みました。

「僕はカービィ。君は？」

「……グーイ」

僕は短く答えました。

「よろしく、グーイ」

それから僕はカービイの家で「厄介になる」とになりました。素性のよく分からない僕を、カービイは快く受け入れてくれました。僕の中に何かやわらかくて温かいものが広がったような気がしたのですが、それをどう表現するのが当時の僕は知りませんでした。

やがて、同胞が倒されたという話を耳にしました。その時僕は少しだけ寒気を感じてしまいました。もしも僕がダークマターだとカービイに知られてしまったらどうしようと思ったのです。

それから何事も無い穏やかな日々が流れて、こんな日がずっと続けばいいのにと僕は少し怯えながら、ただ一心に願いました。けれども現

実はそう甘くは無く、ある夜僕は自分の体の異変に気付きました。体は少し地面から浮いていて、ダークマター特有の『球』が自分の周りに浮いているのです。僕の中の闇が覚醒した証でした。

「グーイ、どうしたの？」

その姿を見て、カービイは開口一番にそう言いました。

「僕はダークマターです」

これ以上押し隠すのは無理と判断した僕は潔く白状しました。カービイは目をぱちくりさせて僕を見ます。相当驚いたのでしょうか。

「どうして今まで黙ってたの？」

当然の質問が返ってきました。僕は彼を騙していたことになるのですから。もしも彼に怒ら

れても文句は言えません。

「嫌われると思ったからです」

なので僕は正直に言いました。かつての同胞が聞いたら笑われるかもしれませんが、僕には本来ならば敵であるはずのカービィに嫌われることがとても辛いことのように思えたのです。

「……グーイ」

カービィは言葉を詰まらせます。その顔はなんだか機嫌の悪いように思えました。

「僕にはそれが怖かったです。あなたに嫌われるのが。だから、言えませんでした」

僕はそれだけ言ってカービィに頭を下げます。申し訳の無い気持ちでいっぱいでした。

「ダークマターでも、なんでも、関係無いよ」

カービィの口から出てきたのは、意外なひと

ことでした。

「え？」

思わず僕は頓狂な声をあげてしまいました。

「どうして言ってくれなかったの？ 隠し事されてたなんて、ちょっとシヨックだよ。そりゃあ、内容が内容だけだよ」

カービィが怒っていたのは僕がダークマターだったことではなく、僕が隠し事をしていたというその点でだったのです。

「どれが何だろうと、グーイはグーイだもん。真っ黒で真ん丸い僕の友達」

そう言ってカービィはにっこりと微笑みます。また僕の心の中にやわらかくて温かいものが広がりました。

「カービィ……」

「カービィ……」

そう一言呟くと、僕の目から涙が溢れました。
どういわけか止まりそうにありません。

「おかしいですね。どうして、涙が」

慌てて僕は涙をぬぐいます。しかしぬぐっても、ぬぐっても、涙は一向に止まる気配がありません。やわらかくて温かい感情で、僕の心は張り裂けそうでした。

「ああ……以前あなたに助けられた時も、こんな感情になりました」

涙で言葉が上手く出ませんでした。

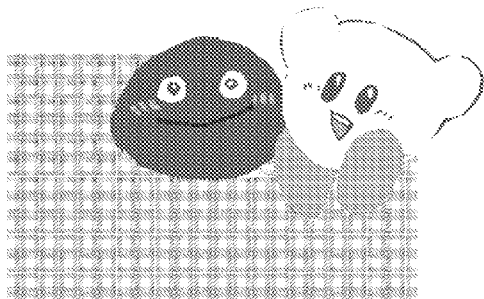
「あの時はこの感情に当てはまる表現が思いつかなかったんですけど、今なら分かります」

僕はおそらく助けて欲しかったのです。あの冷たくて深い闇の中から、この暖かな光の元へ。

「ありがとう」

それはこの心に広がった、やわらかで温かい感情の名前でした。

FIN



西の国からご挨拶、みすたあぼんと申します。お目通し頂き、ありがとうございます。『ぼかぼかハート』いかがだったでしょうか？

グレイメインの小説は実はこれが初めてなのですが、書いていてとても楽しかったです。普段は大王様ばかり書いているので、たまには違うキャラクターもいいなと思いました。読んだ皆様にも楽しんでいただければ幸いです。

この機会を与えてくださったMLと読んで下さった皆様に感謝を込めて。
みすたあぼん

みすたあぼんさんの作品はいかがでしたか？もしこれでカービィ小説に興味を持って頂けたようでしたら、是非KNMLを覗いてみて下さい。沢山のカービィ小説が、貴方をお待ちしています。では、Webや次のペーパーで再会できることを願いつつ、失礼致します！ ハガネカービィ

◆ 奥付 ◆

きょうのごはん Vol.2

2010. 3. 21 HARU COMIC CITY15 発行

カービィ小説ML出版部

(<http://www.knml.net/>)

本文：みすたあぼん 表紙・カット：極餅

編集協力：tate 発行：ハガネカービィ

